

24 今更？だが、「教育」にこだわる理由?!そして、改めて期待したいことは?!

堂本 彰夫

(1) 「教育の目的」を「並置」にした?!否、そう理解したことが、矛盾（間違い?）であった?!

今更、こういうことを言っても仕方がないが、ある意味今ほど、「教育とは何か?」を考えさせられる日々はない?否、正直なところ、その教育の「無力（儂さ?）」を、嫌と言うほど思い知らされているということである?!学校（教育）は、その存在の危うさを、ますます露呈させているし（いじめ・不登校・引きこもりの増大、教職員の疲労困憊、PTAの崩壊?等）、他方の社会教育（行政）は、その形・名称において、まさに雲散霧消の状態ともなっている?!「教育の危機?」と言えばそれまでだが、とりわけ学校教育の方では、そのほとんどの関係者が、眼前の諸問題に振り回され（掻き乱され?）、自らが関わって（行って）いる「教育の営み」に自信喪失し、諦観したり、心を病んだり、挙句の果てには、離職をも厭わないという事態にまで、それが進行している（もちろん、それを、マスコミが、必要以上に吹聴しているということもあるが?）?!ちなみに、そうしたことは、あまり表面的には騒がれないが（やはり社会問題とはされないということか?）、れっきとした「教育」の営みである「社会教育（行政）」の方でも言えることなのである?!

ところで、そんな教育のあり方（理念/方向性）を示した教育基本法には、「教育の目的」として、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた国民の育成を期して行われなければならない。」（同法第一条）とある。すなわち、周知のように、本規定は、かの戦前の教育の反省に立って、新たなあり方を示したものであるが（ただし、これは、2006年の改正によるものである!表現は、若干修正されている!しかし、その精神は変わっていない?）、そこには、大きくは、「（個々の）人格の完成」と「平和で民主的な国家及び社会の形成者…国民の育成」という、二つの側面（要素）がある!だが、よくよく眺めてみると、その双方は、決して並列的に示されているわけではない?!

改めて、それは、あたかも併記的な書き方（「~目指し」+「~期して」）とはなっているが、あくまでも、それぞれが別個な目標として措定されているわけではないということである!しかしながら、実際は、これが、どういう訳か?目的の並置的表現とされ（勘違いされ?実は、私もそうであった!）、前者が「個人的側面」（の目標）、後者が「社会的側面（の目標）」ということになってしまっているのではないか?!そこに、重大な矛盾（間違い?）があったのではないか?そういうことである?!とは言え、その理解（勘違い?）には、大きな理由があったことも事実である?端的に、前者には、戦前の「国家主義（皇国史観）」を超克すべく、国民一人ひとり人間性や個性を尊重していこうとする姿勢が示されていると言えるからである（つまり、「人格（生命）」が、「国家及び社会」に埋没させられ、あるいは犠牲を強いられるはいけないということ!）?!

いずれにしても、考え方（理念）としては、まさにその通りなのであるが、戦後間もない頃の状況においては、それは、まさに画期的な規定でもあったわけである!だから、今でも、それ自体については、誰も異論を挟まない（挟めない?）のである（絶対普遍?）?!しかし、ある意味それだからこそ、後者の規定における「社会」と「国家」の受け止め方に、新たな注目がなされたとも言える（かの改正において、当初の「社会及び国家」が「国家及び社会」に変更されている!）?!ある種の危惧も感じられるが、実は、それは、教育の目的を、言わば二本立てで理解してきたことへのツケ?だとも言える?!さらには、その後「ネット社会」というものも出現しているが、そこにおける、「個人」と「社会（もちろんここでは「国家」も含む!）」のあり方、関係の仕方が、新たに問われてきてもいるということである（便利で、様々な可能性があるが、そのことが、一方では、「個人」と「社会（及び国家?）」の関係の中で、予期せぬ事件、悲劇?を生む土壌にもなってきている?）?!

(2) 今、いみじくも思う!両者は、「相即不可分」のものである!しかも、前者は、後者を必要とする?!

ということで、いみじくも今思えば、さらには、誤解を恐れずに言えば、教育基本法に示された二つの側面（要素）は、まさに「相即不可分」であり、片方だけを（あるいは一方を不問にして?）、別々に取り扱ってはいけないということである!歴史的には、「並置?」であることの方が進歩的であり（ある意味妥協の産物とも言えるが?）、その双方を掲げて邁進することが、事実上は歓迎されたということではあるが（直接の法案起草者が、そのことを意識していたかどうかは、私には分からないが?）、今改めて（これからは?）、「（個々の）人格」と「国家及び社会」（本当は、少なくとも「社会及び国家」にしたいのであるが!以下、同じ!）は、明確に連動して、その課題に向き合わなければいけないということである!

そこで、ここではっきりと言おう!前者（「（個々の）人格」）は、後者（「国家及び社会」）を通じて達成される（べき）ものということである!否、そうでなければ、「（個々の）人格の完成」といっても、その実体があやふや（抽象過ぎる?）!あるいは、「国家及び社会」を抜きにした「人格」は、およそ考えられないとい

うことである！そもそも、それは、ある特定の、つまり、生まれ育つ場所としての、その「国家及び社会」（言語や文化、生活様式等）を通じて形成されるものであるのである（例の「狼に育てられた少女／アマラとカマラ」が、それを実証している！）！

しかも、「個性」とか「多様性」とか言っても、そこにある何らかの基準（「国家及び社会」における）がなければ、それは、単なる違いであって、それ自体には、何の意味（価値）はない?!例えば、「同調圧力」とか、「ちょっとした違いに意味をもたせる」というようなことは、その辺りのことを、暗に（否、如実に?）示している（ただし、いわゆる「障害」や「言われなき差別」等は、別な意味での配慮が必要であることは言うまでもない!）?!実は、そうしたことに対する認識の齟齬（矛盾?）が徐々に増大し、その臨界を迎えつつあるのが、現在の状況なのではないかということでもある?それ故に、ここで、改めて重要となってくるのが（くどいようであるが!）、「国家及び社会」ということになる?!すなわち、どちらを先に示すかによって、その意図するところが異なってくるということである?!

しかるに、実際には、その「国家及び社会」が、そこで生きる人間（人格）から遊離し、それらが、言わば「相対的存在化」してきたということがある（尤も、「国家及び社会」と「個人」との関係は、もともとそういうものではあるが?!）!しかも、その表記「国家及び社会」が、「及び」で結ばれていることから分かるように、「国家」と「社会」の間には、微妙な関係が明示されてもいるわけである?!すなわち、もともと「国家」も、「社会」の一部（形態）ではあるが、その「国家」を、特別に一つだけ外に出し、その他の?「社会」とは異なったものとしなければ、話が進まなかったものとも言えるのである（それが、ある種のイデオロギー闘争を生むこととなり、悩ましいのでもあるが、しかし、それは、人間社会（集団）の宿命なのでもある!）?!

(3)「人格の完成」と「国家及び社会の形成者（国民）の育成」を同時に、そして矛盾なく進めていくには?!

いずれにしても、私自身は、あくまでも「社会」の方が先に来ると考えるのであるが、ここで難しいのは、改めての「国家」と「社会」の関係理解であり、現実体としての「国家」（政府やその機関）のあり様なのである!つまり、現実体としての「国家」は、国民（一人ひとりの人格）が直接的に参画している諸「社会」の一つではなく、ある時は、彼らを制約する、下手をすれば、彼らと対峙する、まさに「向こう側の存在」ともなるということである（問題はここなのである?）!こうなると、「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた国民の育成」と言われれば、たとえ、そこに「…及び社会…」が入っているにしても、実際の受け止め方としては、その部分がほとんど捨象されて（雲散霧消して?）しまうわけである?!だから、ある人達（民主的／革新的と標榜する人々?）にとっては、もう一つの、まさに「個人的側面」としての「人格の完成」が、より価値のあるものとして意識されてしまうのでもある?!

でも、やはり冷静（冷静?）にみれば、そうした二分法的理解（了解?）が、いかに空しいもの（理想的過ぎる?）であるかは、それこそ、昨今の某国（複数あり!）を見れば明らかである!また、ひょっとしたら、別の某国（複数あり!）には、また違った様相もある（個人主義の横行?）?!だから、「個人的側面」とか「社会的側面」とか分けてみたところで、そこでは、「個人」も「社会」も、「国（家）」という名の下に包摂され、「人格の完成」はともかく、「平和で民主的な国家及び社会」ということにはならない!そしてまた、そこでは、他ならぬ「個人」が浮遊するということにもなるのである?!

最後に、こういうことを書くのは、日夜頑張っている（否、夜はダメ!）、そして、本当に四苦八苦ししている人達には何の役にも立たない、ある意味どうでもよいことと言われても仕方がないが（実際、何の助けにもならない?）、私は、「教育の戦後」とは、「個人と集団」、「社会と国家」との関係を冷静に捉え直し、そこにおける教育の役割（決して「学校」だけでない!）を、改めて明示し、それに基づく有効なしくみ（そのための人材養成／適正配置も含めて!）を創り上げていくことで終わると考えている!余談だが、そうでなければ、ここまで引きずってきた甲斐もない?!改めて、それは、「学校教育」と「社会教育」の融合（生涯教育（学習）体系の構築!）ということである（その双方の「合力」が必要だということである!）!

これらを、教育関係者の理想主義・楽観主義と言って、揶揄する人々もいるであろうが（事件・事故が発覚すると、そういう言質を取る人がいる?）、しかし、一方で、そういう人達がいる（た）からこそ、今日のような発展（それなりの状況?）を迎えることが出来ているのでもある?!しかも、それは、何も歴史に名を遺す（した）人達だけでない!否、むしろ名もなき、だが、「心ある人達」によってであることは言うまでもない（ただし、それは、その人達によって実現されたものではあるが、多くは、その人達とのつながり、思いの共有によって、今でいうコミュニティ（共同体）という形で実現されてきたものである?）!そして、ここが重要であるが、人は（子ども時代だけではない!）、「コミュニティ（共同体）」によって（を通じて）、その「人格」と「社会（国家）の形成者としての資質」を獲得（習得）してきたのである?!だから、ある意味、「教育の目的」は、逆説的に（つまり現実にはなかなか実現されないものだからこそ）、必要だとも言えるのである?!（つづく）